

# ステップ・アップ

2007(平成19)年3月18日鑑賞(道頓堀角座)

★★★★



監督=アン・フレッチャー/出演=チャニング・テイタム/ジェナ・ディーワン/マリオ/ドリュエ・シドラ/ジョシュ・ヘンダーソン/レイチェル・グリフィス/ダメイン・ラドクリフ/ディシャウン・ワシントン/ドロン・ハウエル (エイベックス・エンタテインメント、松竹配給/2006年アメリカ映画/100分)

……ダンス映画といえば、『サタデー・ナイト・フィーバー』や『フラッシュダンス』が超有名。この映画はバレエとストリートダンスの融合が売りで、そのクライマックスシーンはすばらしいが、そこに至るまでの練習風景のシーンを少し出し惜しみしたのが欠点……？ それは、恋愛物語と友情物語のストーリー性を重視したためだが、やはり本来のダンス映画に徹し、ダンスシーンをてんこ盛りにした方が良かったのでは……？

## 私にとっては2本目の……

パンフレットによると、本格的ダンス映画はたくさんあるが、その興行収入第1位は『サタデー・ナイト・フィーバー』(77年)、第2位は『フラッシュダンス』(83年)であり、この『ステップ・アップ』は歴代5位にランクインしたとのこと。私はミュージカル映画が大好きでたくさん観ているが、ダンス映画は『フェーム』(80年)や『リトルダンサー』(00年)などの有名な作品も意外と観ていないし、『サタデー・ナイト・フィーバー』も映画館できちんと観ていない。しかし『フラッシュダンス』は私の大好きな映画で、かつて北新地の飲み屋で美声を誇っていた頃(?)は、あの『フラッシュダンス』の曲にも少し挑戦したことがあるほど……？ したがってこの『ステップ・アップ』は、私にとっては『フラッシュダンス』に続く2本目の本格的ダンス映画……。

## バレエとストリートダンスの融合とは……？

この映画の宣伝文句は「心揺さぶる音楽のストリートダンスと、クラシックバレエの融合。」「これまでにない新しいスタイルのダンスで見せる青春映画が誕生！」というもの。そして私の乏しいダンスに関する知識でも、クライマックスシーンで展開される新しいスタイルのダンスのすばらしさは十分理解できるもの。

そこでさらに、パンフレットの中にある「ダンス見どころガイド！」や「バレエ×ストリートダンスの違いを CHECK!!」に書かれてあることをきちんと勉強し理解すれば、その楽しさがさらに広がること確かだが……。

## ホントは困った若者たち……？

この映画の舞台はアメリカ北東部の工業都市ボルチモア。主人公タイラー（チャニング・テイタム）は学校には通っているらしいが、毎日親友のマック（ダメイン・ラドクリフ）やその弟のスキニー（ディシャウン・ワシントン）とつるんで（？）遊び回り、ストリートダンスやバスケットに興じている若者。それだけならまだいいが、車両窃盗の常習犯のようだし、今日もたまたま割ってしまったガラス窓から侵入した芸術学校の講堂の舞台で遊び回りながら、立派な備品を次々と壊しまくっている姿を見ると、こんなクソガキには困ったものだと思うのが当然。ところが、こんな場合、少年法で裁かれる日本とは大違いで、警察に捕まったタイラーに裁判所が下した判決は、200時間の奉仕活動というもの……。

## こちらは超真面目なお嬢さん……

そんな不良少年タイラーに対して、芸術学校に通うバレエダンサーのノーラ（ジェナ・ディーワン）は、発表会に向けてバレエの練習を続けている超真面目な女の子。この発表会で結果が出なければ、母親の薦める大学へ進学しなければならないから、今ノーラは必死。

そんな状況の中、タイラーとノーラが学校内で偶然出会い、ノーラのバレエとタイラーのストリートダンスを互いに見ることによって、互いに何かを意識したよう……。しかし、一方は労働奉仕を命じられた不良の男の子、他方はエリート

の真面目なお嬢さんだから、そんな2人の接点などありえない、のが当然……。

## ノーラが怒るのはごもっとも……

そんな2人に接点ができたのは、ノーラのダンスパートナーであったアンドリュウのケガ。急いで代役を探さなければならないが、ボーイフレンドのブレット（ジョシュ・ヘンダーソン）からは自分の音楽のことで精一杯と断られるし、下級生でオーディションをやっても、「リフト」すら満足にできない有り様……。

それを見かねたタイラーが代役をやってみると、軽々と「リフト」をクリア。「これはいけそう……」「こんな近くに掘り出しモノが……」と喜んだノーラだったが、所詮タイラーは無気力でいい加減な若者。したがって、発表会に向けてすべての努力を傾注しているノーラの気持などタイラーには知ったことではないから、たまたま練習に遅刻したことを責められると、あっさり「辞める」ときた……。ノーラがこんなタイラーに対して怒るのはごもっともだが、そもそも、こんな不良を信用したノーラがバカだった……？

## 練習風景の出し惜しみ……？

この映画はタイラーのいい加減さがかなり目立つが、クライマックスで待っている最高のダンスシーン実現のためには、2人の気持が1つになっていることが当然の前提。したがって、そのためのストーリーづくりの重要性は認めるものの、本格的ダンス映画にはややこしいストーリーよりも、ダンスのすばらしさを全面に押し出した方がいいのでは……？ この映画が監督デビュー作となったアン・フレッチャーは、振付師として映画界で有名な1966年生まれ的女性ということだが、私としては、彼女にそんなアドバイスを送りたい……。

ストーリー性重視の結果、ノーラがタイラーに教えるバレエの基本をタイラーがマスターしていく様子や、逆にタイラーのアドバイスを受けて新しくできあがってくるバレエとストリートダンスの融合の様子などの練習シーンが少ないのが、私には若干不満。本番であれだけのダンスを見せるためには、相当な練習が必要なはず。『フラッシュダンス』や『コーラスライン』（85年）を観ても、ある意味で本番シーン以上に練習風景の方が面白いところもあるのだから……。

## 不要な面と足らざる面も……

アン・フレッチャー監督がこの映画のストーリー性を重視するためにとり入れたのが、徐々にダンスパートナーとしてのウエイトと、恋心が強まってくるタイラーに、ノーラとの恋愛とマックらとの友情のどちらかを選択させるという手法。しかし私に言わせれば、そんな無理にとってつけたようなストーリーは不要……。だって、タイラーの親友のマックもその弟のスキニーも、タイラーがいかに出来の悪い若者であるかを示すために存在しているだけだから……。また、仲間たちから恐れられているPJ（ドロン・ハウエル）の車を盗んだことが原因で、スキニーが殺されてしまう物語も、少しこじつけ気味……？

他方、ノーラのダンス仲間のルーシー（ドリユー・シドラ）とダンス音楽の作曲家マイルズ（マリオ）は、ストーリー構成上不可欠のキャラだが、人物像の描き方は若干粗雑……。まあ、監督初作品だから仕方ないのかもしれないが……。

## ジェナ・ディーワンの今後に期待！

ダンスシーンではどうしても視線が色っぽい女性の方に集中してしまうのは、中年男の性<sup>さが</sup>……。そんなわけで、ラストのクライマックスシーンでは、私の目はノーラを演ずる1980年生まれの若手女優ジェナ・ディーワンの肢体とバレエテクニックに釘付け……。もっとも、彼女はバレエの基礎は備えていたものの、もともとプロのバレエダンサーではないから、この映画のために一生懸命練習をして、このレベルに達したもの。したがって、『オペラ座の怪人』（04年）のクリスティーン役で天性の美声を聴かせてくれた女優エミー・ロッサムのような存在とは全く異なるもの……。

パンフレットを見ると、アントニオ・バンデラスと共演した『Take the Lead』（06年）や日本の清水崇監督の『The Grudge 2』（06年）にも出演しているとのことだが、この『ステップ・アップ』が当面彼女の代表作になるのは当然。そこで問題は、今回はどんな作品で主演として登場するか、ということ。ハリウッドにはいくらでも有望な若手女優がいるから、彼女にとっては次回作がポイント。大いに頑張ってもらいたいものだが……。 2007(平成19)年3月19日記